

令和6年度福島県立石川高等学校
第4回学校運営協議会及び意見交流会 開催記録

■日 時 令和6年12月12日(木) 15:00~16:30

■場 所 石川高等学校 会議室

■参加者 委員

熊井トシエ、齋藤一彦、水野 憲一、二瓶 伸一、佐川 正美、石沢 泰蔵、酒井 修三、
宗像 研也、小川 和英

事務局(石川高等学校)

事務長、教頭、教務主任、生徒指導主事、進路指導主事、地域連携推進主任、
県立石川高校魅力化支援員

1 開会のことば 石川町商工会会長 齋藤一彦 副会長

2 会長あいさつ 学校運営協議会 熊井トシエ 会長

- ・第3回学校運営協議会では、石菜祭との共催を利し意見交流会を成功裏に終えた。
- ・卒業生の大石君の講演から、石川高校の魅力について再認識できた。
- ・今回は、今年度の活動の振り返りと、来年度へ向けての重要課題抽出、また、活動成果産出を見込みたい。

3 校長あいさつ 県立石川高校 校長 小川和英

- ・今年度より、コミュニティースクールになり、「一人一人が主人公の学校」を令和6年度本校学校運営協議会のテーマに据えた。
- ・石川郡唯一の県立高校であり、創立101周年を迎えた伝統校でもある。統廃合が議論される中、令和6年度より1学年1クラス化で存続し、全校生徒130名弱、男女比半々ぐらいの普通科である。
- ・コミュニティースクールとなり、いっそう、いしかわ WORK&LIFE 教育が中心に据えられ、今年度は、石川町との合同防災訓練に加え、石川町の議会議員さんとの交流会も予定され、地域と協働した学校運営がより形となって広報されている。
- ・本校の教育目標は、社会に貢献できる人材の育成である。文化祭のテーマは、生徒が厳選した「一人一人が主人公」、それぞれの個性が消し去られず、全体として調和を保ってみんなが活躍できる学校を、「カラフル」で抽象化されている。学校運営協議会と生徒の視点が、奇遇にもテーマとして重なり、生徒も多様性を理解し合う学校生活を営んでいると推察する。
- ・令和8年度から全学年1学級が完成する。教職員数が7名になり、今までの行事ができるのか、成果が求められる中で不安も募る。
- ・校内の学校組織改正に向けて、職員研修を開催した。また、部活動統廃合について、生徒総会を経て、生徒の気持ちを踏まえ、適正な部活数へ移行する準備を整えている。
- ・PTA や同窓会の活動について、定員数減に乗じて保護者の数も減っている。双方の活動を維持しながら、効

率的に進め、教育活動全てを見渡した上での最適化された教育提供を分配したい。

- ・生徒が学びがよいがある、教員が働きがよいがある、双方良しの関係で、今後の改革を進めていきたい。
- ・学校運営協議会の活動方針では、学校教育目標に向けて、運営協議会委員の皆様と、方向性の間合いを縮めながら進めたい。
- ・学校運営協議会が、教職員の知らないところで何かを決めている、教職員はそれをただ受け取る、という構図にならないよう注意されたい。教員と一緒に学校経営に参画され、協働で本校の未来を考えていただきたい。
- ・本会には、成果目標と、年度末における成果結果が求められる。教員、地域、生徒にとってウェルビーングな活動となるよう必要な活動、減らす活動を精選する責務も本協議会にはある。成果を達成するためにどのような活動が必要であるかを熟議するために、旧年度の成果をPDCAの視点から分析し、分かりやすい、もって熟議もしやすいという資料を用いたい。
- ・学校運営協議会元年にあたりアンケートを取った。教職員と地域とのつながりを深めることができたか、という問いは、非常に好評であった。
- ・生徒に対する評価は3学期に行われる。生徒の強みや弱さについて、観点別にて第5回学校運営協議会で示したい。
- ・地域に貢献する力、そして進路実現へ向けての資質能力向上へ向けて、学校での学習機会、地域での成長する機会を貴重に、保護者にも信頼される学校を目指していきたい。

4 今年度の活動の成果と反省

(1) 地場産業理解とキャリアチャレンジ理念のハイブリット化

ア 地域連携部会 石川町以外の郡内町村へキャリア実習職場としての要望検討(校内で検討済 教員の巡回の問題あり)

(2) 成果発表の場を校外に拡充

イ 地域連携部会 社会貢献活動コンテストへの参加 (2024.8.17 ふくしま学びのネットワークより特別奨励賞を受賞)

ウ 学校経営部会 県内コミュニティスクール校との成果交流会(2024.11.10 石菜祭にて県内コミュニティスクール紹介展示への協力)

エ 生徒活動部会 自治センター等にて、総探活動において大学生とのセッション活動を行う (2024.9.26 福島大学人間発達文化学類学生との交流事業 授業参観及び生徒会との意見交換会を実施)

オ 地域連携部会 山形県小国町に於いての第7回全国高等学校小規模校サミット参加 (2024.7.25 生徒5名、齋藤正廣支援員、教諭2名参加)

(3) 成果の客観的把握とPDCAサイクルの好循環

カ 生徒活動部会 ルーブリックを用いた探究力の育成度合分析 (2025.1月に実施計画)

キ 地域連携部会 企業評価の利用 (2025.5月に実施計画)

ク 学校経営部会 令和7年度高校入試における各町村教育長への働きかけ (2024.8. 石川郡内訪問実施)

ケ 学校経営部会 地域連携担当教諭1名の任用要望(県への加配要望枠要望済)

委員からの質問) クを行った際、教育長の回答をお聞かせください。

回答) 各町村教育長さんには、本校の取り組みを理解くださった感触がある。

5 各部会より

(1) 学校経営部会 石川町生涯学習課 課長 佐川正美 委員

- ・石川高校の魅力を高めるためには、少人数でも生徒が志望する実績があれば良いと考えている。現在の活動を継続して行っていくことで生徒の力を安定的に高めることになるため、生徒の現行の活動を大事にして欲しい。
- ・教育長を訪問できるというのは、PR する教育環境があるからである。誇らしく思うとともに、さらに PR する方法を洗練されたい。
- ・県内コミュニティスクール8校での交流会は、大いに生徒へ還元される行事である。

(2) 地域連携部会 石川町企画商工課 課長 水野憲一 委員

- ・キャリアチャレンジ受講者が、年々減ってきている。今後は、来年度企業評価を実施し、効果について客観的に分析するとともに、既に9年経過している教育活動という視点では、事業の見直しも検討してはどうか。
- ・受け入れる事業者側や、派遣される生徒たち双方に、アルバイト的に生徒たちを受入れるという懸念を脱するため、事業者側がより一層、本教育が目指す地域で生徒を育てる、という視点で受入れていただく必要がある。
- ・受講する生徒の適職を重視した際、生徒の配属について、公共性のある機関に配置する、あるいは民間企業で企業体験をする等、生徒理解を踏まえた配属先にすべく今後も検討が必要ではないか。
- ・総合的な探究の時間は、徐々に学校での授業が充実し、発表内容も見応えのあるものになっている。各地域の方々も、一緒に参加していただいて成果が出てきているためである。中谷自治センターさんにおいて、協働して商品開発を行い、イベントでの販売に漕ぎ着けた、また学校文化祭で成果発表を掲示し、商品の販売、またテレビ放映もされた、という実績から今後も発展していく期待がある。
- ・石川町内だけではなく、石川郡内外の場所にも赴き、興味関心に応じた学習をしている。地域に関わる人に育ててもらおうという、最終目標を達成できている。

(3) 生徒活動部会 石川町教育委員会 教育課長 二瓶伸一 委員

- ・自治センターでの活動、福島大学来校、それぞれについて地域の方にも喜んで頂けた。
- ・石菜祭を成功させるために生徒会活動を活発化させる上で、教えられる立ち場の生徒たちが、主体的に活動に参加できたことが十分評価できる。
- ・生徒の活動の中で、学校の雰囲気が生徒たちの生き生きとした姿で包まれ、石川高校で自己実現でき満たされた心が育まれれば、生徒が石川高校の良さ地域に発信する波及効果が期待できる。
- ・今後の課題は、教職員と先生方の数が減っていく過程で、既存の活動を継続できるか、また、どの様にして効率的に運営していくか、検討される必要がある。

6 各委員より

(1) 石川町商工会会長 齋藤一彦 副会長

・福島の商工会の会長という立場から、キャリアチャレンジの人数が年々減っていることは、就業への関心という点で心配され、さらに今後の受講者増を期待したい。来年は多くの人数が受講し、大きな規模でWORK & LIFE 教育を支える形になると嬉しい。受入れ側の立場として、アルバイト的な感覚で受け入れるのではなく、学校の教育目標と同調しながら、既存制度から良い成果が生まれるよう支援いただけるような体制が望まれる。

・企業選択についても、学習者主体という視座で、地域の人に育ててもらい本カリキュラムの利点が発揮されながら、生徒の達成感を生まれるよう企業との教育理念の共有も必要である。

・地域は、様々な体験を通して、学校ではできないような学ぶ機会を提供できる、良さを協働する長所ととらえバックアップしたい。

(2) 石川町企画商工課 水野憲一 課長

・石川町のまちづくりとして、共創のまちづくりを総合計画の中で掲げている。共に町を作っていきましょうという考えである。まちづくりの柱の視点では、先生方の数が令和8年には7名になるということを踏まえると、学校経営に対してまちづくりの理念と相乗した、経営の側面的な支援を石川町が担わなければならないと、さらに認識を深めた。

・先生方と一緒に学校経営を考え、経営実現のために、町としても補助金制度から支援したい。他方、町全体でボランティア、言い換えると、自発的な生徒支援が自然と涵養される人材育成、学校を支援する人をつくる、理想的な地域人材力がある状態が必要であると感じる。町の人づくりは、学校ではなく、町でやるべきだと考える。

・生徒が積極的に日々活動できる環境づくりが基礎であり、次に活動を支える先生方の力が大切である。先生方が取り組める環境づくりをどのように町としてバックアップできるかを、さらに今後も考えていかなければならない。

(3) 石川町教育委員会 教育課 二瓶伸一 課長

・10月に開催された合同防災訓練が活気にあふれ、町民との疑似避難体験が成功した。

・町民と高校生が接する機会は多くはなく、共助という地域の力を互いに確認し合い非常に有益であった。

・石川高校の生徒が、町の様々な行事の機会に触れ、自分の経験を蓄積していく時間は、県立石川高校が得る地域からの教育力という理想的な形へと昇華していくのではないか。

・小さい子が県立石川高校の生徒を見て、高校生の魅力を直に感じ取る、高校生にあこがれる、そして石川高校の生徒は自校の良い校風を直に伝える機会を利すれば、積極的な活動参加が魅力的な姿に写り、地元の高校のPRにつながる。

(4) 石川町生涯学習課 佐川正美 課長

・学校立地条件について、地元であれば地の利がある。通学時間が短い、近い通学であれば、学習時間に

充てられる利点がある。つまり、近くに行きたい学校があることが1番である。

- ・石川高校は石川郡内にあり、郡内の住民の身近な学校である。地元の方へPRしながら、石川高校を志す生徒が、増える学校にしたい。

- ・日常の活動そのものが魅力となっている。広報活動を工夫しながらも、他方、単年度では、結果がすぐ出るものでもない。短期というよりは、中期に立った視点で目標を立ててはどうだろうか。

(5) 石川小学校 酒井 修三 校長

- ・小学校という立場では、小学生と高校生の距離感は遠い感覚が事実である。しかし、石川町図書館の中に、「石川高校生が選ぶ図書」のコーナーがある。大人向けの図書ではあったが、例えば、石川高校生が選ぶ絵本と題した生徒たちの活動があると、小学生が少しずつ石川高校を身近に感じるのではないか。

- ・小学校でも同じだが、職員が少ないと、仕事の分量が各教員に重くのしかかってくる。

- ・ボランティアも大事ではあるが、日々の活動が生徒の力に直結する。生徒活動部会でも、石川高校生がとでも生き生きと活動している話があり、学校で輝けることが大事だと思う。

- ・高校生が小学校へ出向く活動もお互いの成長につながる。業務のバランスを重視しながら、実現可能であれば魅力的な発信になるのではないか。

(6) 石川中学校 石沢泰蔵 校長

- ・今年度は、昨年度より増して、石川高校と係わり合いが強くなり大変感謝申し上げる。先生方のご様子も拝見する機会も増えた中で、いしかわ WORK&LIFE 教育は先生方のご尽力に支えられていると感じた。生徒が主体となった学習であり、地域との関わりを生徒たちが語り、うそのない、生徒自身が地域の中で写る本物の姿を地域へ伝えている。校外にて生徒の活動の様子を提供いただく機会が今後も続くことを願い、これからも、大人が生徒の取り組みを拝見し、温かい目で成長を称えていきたい。

- ・今後の課題として、教員7名は実に大変さが予想される。視点を変えた発想が大事である、換言すれば、これまで当然として計上した予算や、高等教育の当たり前から一端距離を置いてみる。例として、小さいグループのストーリーを描いてはどうだろうか。つまり、家庭を支えて、生徒個人を支える。成果もこのようなすばらしい生徒がいますよ、だけではなく、石川高校に入ると、大きく成長できますよ、という個別のストーリーを作る。県立石川高校で学んだ恩恵を、質の面で特色化を打ち出していけば、絶対数が多くなかったとしても、選ばれる学校になる。保護者や生徒が望む教育と学校が提供する教育が合致するストーリーになってほしい。石川高校の個を重視し、変容に携わったストーリーを多くの人が言わなくても良い。定員40名であれば、40名の家庭に響けば良い。

- ・教職員が7名余りになるため、先生方が個を大切にされた教育過程を語り、教育の質の良さと石川高校の温かさを伝えられないか、温かい教育は時代にも合っており、保護者が期待する学校像になる。

(7) 父母と教師の会 宗像研也 会長

- ・今現在在籍する子供がおり、学校に通わせている親の立場から、通いやすい学校へ通学させたいという地域の事情がある。しかし、バス代や、バスの運行条件が家庭に影響し、通わせ難いというのは現実的な問題

としてある。平田村の議会にもバスの運行について働きかけたが、課題解決へのハードルが高い。どこの地域でもバス代の問題を抱え、特に古殿町、平田村、いわきの三和町の親御さんたちは、どうやって子供を学校に通わせていいかわからない、と言っている。通学可能な地域に限られ、通学を支援するバスがない、電車がいないという現実的な課題がある。今年、路線バスの改定について県、国双方が動き出した新聞発表があった。赤字路線、乗客者の少ない路線は見直すことが打ち出されているが、現実として、平田村から、いわき地区に通ってる学生の中で、土日のバスがなく、土日の部活と自動車学校に通いたいという学生が、いわき地区に旅行できない問題が実際発生している。子供だけを下宿させる手段もあるが、家計を含めた支出面を総計し、若い夫婦、家族、家族ごと現住所から移転し、便利な地域に住む選択をする家庭も出てくるだろう。

・石川高校は見てもらえれば、とても魅力ある学校である。実際、学校見学に参加した生徒が、この学校でやりたいと、決意を述べている生徒に出会った。今でも十分魅力ある学校だと思うが、これからもっと魅力ある学校を目指そうとする動きも確かに大切だと思う一方で、実際通えない、通う手段がない、という環境がある。民間バスや、地域のスクールバスの運行等を検討する機会が今後あって良いのではないかな。

(8) 学校運営協議会 熊井トシエ 会長

・学校運営協議会に関わり、みなさんが石川高校を頻繁に見ているという感覚と、同時にあまり見ていないのではないかと感じる面もある。しかし、現実には、高校生が自治センターに行って商品を開発するという、今までにない発想に高校生の力を感じる。

・石川議会だより、石川町民ニュース、夕刊いしかわから、石川高校の記事を求められる。記事として広報されれば、地域の人が活動を知り、石川高校への認知度も上がってくる。さらに、石川町民が後援する気運の高まりを感じる。石川高校がなくなる心配はよく耳にする。職員7名は衝撃的であり、同窓会として協力のあり方を考えたい。また、本会からも何か協力できるものはないかな話し合いたい。

・石菜祭では400人ぐらいの集客があった。教室を回ると、空室になっている部屋もあり、小規模化している実情を肌で感じ、何かお手伝いできるものがなかったかと思いを巡らした。石菜祭に足を運ぶ人が多く、久しぶりの公開文化祭でもあり、地域から注目された行事であったことを覗えた。

・生徒たちが生き生きと持ち場の役割を果たしていた。日常の様子から考えると、大きく社交性に富む姿が見られ、石川高校での教育活動が、あらためて生徒の伸長を支えるものであり、生徒もそれに応えている様子が見れた。

(9) 県立石川高校 校長 小川和英

・今回、様々な視点からご意見をいただき、多くの支援に支えられていることを感謝申し上げなければならぬ。公共交通機関を利用した通学の指摘から、高校選択は自己実現がどこまでできるのか、に依っているため、高校を選択するため通学環境は大きな進路選択の要素であると感じた。当然ながら、公共交通機関があり、保護者さんの送迎が可能か否か、実は学校選択に大きく影響しているというご意見を各教育長さんや中学校の校長先生から助言いただいた。

・次回は、令和7年度の学校経営・運営ビジョンを案としてご提案したい。今回の協議会を生かし、小集団で

あるということが弱みなのか、小集団だからこそ、それが個性であり、特質であり、そして価値に変わるのではないか、という見方を変えた案を出したい。

・評価についても、外向けの華やかさも大事であるが、生徒本人が、さらに保護者様がどのように満足な3年間を送れたか、満足した卒業を迎えていただけるのか、としての評価基準も検討をしたい。

・石川町からの共創の視点を大事にしたい。地域との共同の中で、本校そして本校生徒及び、教員が石川町から多く享受されるにとどまるだけでは、本校にとっても貴重な成長機会を逃してしまう。3年間で地域と協働し、自分たちは一市民として自覚する、シチズンシップ教育の視点からも、何かをしてもらえる存在ではなく、世の中に何かをしなければいけない、するべき立場にあるんだ、という力を3年間で身につけていくことが肝要である。生徒を社会に送り出し、地域貢献できる生徒、恥ずかしくない生徒を育成していける学校づくりを目指したい。

7 その他

第5回学校運営協議会

日時 令和7年2月17日(月) 15:00～

8 閉会のことば 石川町商工会会長 齋藤一彦 副会長

9 地域連携推進主任からの案内

いしかわ WORK&LIFE 教育成果発表会の開催について

日時 令和7年1月24日(金)